

日本の風土を彩る福井の赤、茜、朱、紅、赫、赭

福井 勇 遺作展

日本人の原風景をこれほどまでに心を込めて描いた画家はいたらどうか

2023(令和5)年10月31日(火)~11月19日(日)

10:30AM~6:00PM 毎週月曜日と11/12(日)は休廊



⑫《柿・栗図》1969(昭和44)年 33.7×53.2cm (10号M)



⑬《柿》制作年不詳 21.1×27.5cm (3号F)



⑬《鶏頭のある風景》1979(昭和54)年 60.7×72.8cm (20号F)

福井勇(1908-1988)は、京都府綾部市に生まれ、師範学校を卒業して教職の道に進んだ。戦前二科展、戦後の行動展に出品して洋画家としても活躍。晩年は京都精華学園理事長、関西美術院理事長などの職を全うし、1983年には京都府文化賞功労賞を受賞した。生涯のほとんどを画家として亀岡市の穴太寺に隣接したアトリエでの作画に没頭した。その没後、代表作の多くは美術館や京都精華大学に寄贈されて保存されているが、柿、栗、虞美人草など、最も愛された小品は散逸してしまっている。福井絵画世界の魅力が全然知らない時代になっっている。気候変動により世界中の自然が、日本固有の風土が危機に瀕している今日、自然環境ばかりではない。現代は、世帯を問わず物事をA-1やTのみで足りると片付ける風潮が支配している。私たちが忘れてかかっているものは何か。福井勇の純朴で精神性豊かな絵画世界を紹介したく本展を企画した。是非ご覧を。



アトリエで制作中の福井勇
画架にある絵は左の作品と思われる
『福井勇画集』(1984年、アースポケット出版部刊)より
転載

⑭《樹・柿・瓦》1967(昭和42)年 京展出品作
91.5×65.2cm (30号P)



⑪《秋の静物》1950年代(昭和25-34)頃 45.7×53.1cm (10号F)

様々な秋の果実が並んでいる。柿、栗、榴櫚、幼稚園の園児が遊戯をしているようにも見える。円座の真ん中に松の実が2個、その集団を外側で見守るいくつかの小さなガラス瓶や小鉢。こちらを園児の様子を見守る父母たちに見立てることができる。

画家は、絵を描く前に構図を決める。この位置が正しいか、いやこちらの方がいいか、あれこれ試行錯誤を重ねた末、一つの考えに集約してゆく。この絵を見ていると、画家が小さな果実たちを、あちらに置いたりこちらに移したりしながら、時間を忘れて戯れている、そんな光景が浮かんでくる。画家にとってまさに至福のときだ。完成された絵を数十年のときを隔てて眺める私は、そのお裾分けにあずかっている。今年の秋は、画家が後半生を過ごし、数々の名作を生んだ亀岡市穴太寺の辺りを散策してみようかと思う。

画家の名を福井勇(一九〇八―一九八八)という。京都府綾部市に生まれ師範学校を卒業して小、中学校の先生をしながら、戦前の二科展、戦後の行動美術展に出品を続けた。一九八一年に京都精華学園理事長となり、関西美術院の理事長にも就任した。朴訥な人柄の教育者として周囲の尊敬を集めていたのである。一九八三年には、京都府文化賞功労賞を授けられた。

美術館で開催される行動展や京展の会場では、福井勇自身の性格が滲み出たかのような、色彩を抑えた画面は、ときには地味すぎて周囲の絵に埋没してしまいがちだった。画壇的には全く無名に終わったが、一部に私を含めて熱烈なファンがいる。中でも、彼が描く柿がたまらない、と多くの人がいう。この「福井勇は柿だ」「柿は赤だ」という観念は、信仰にも近い。その赤色にも赤、紅、赭、朱、茜、と様々な色合いがあった。

愉しい。いろいろな赤の落ち着いた柿の絵のほか、こうした肌色の違った作品に出会うとつい嬉しくなってしまう。洋画家の向井潤吉が彼に与えた「黙柿亭」という(亭)号を、今改めて噛み締めている。

星野桂三著『石を磨く』(2004年より)

福井勇はヒナゲシを描いても離翳菜という文字を使わず「虞美人草」と題した。それが夏目漱石の小説『虞美人草』を意識したものでかどうかは分からない。柿の絵が、ある種禪問答的な配置の妙を感じさせるのに対して、春の花はどれも美しく描かれているようだ。それは、秋と春という季節そのものの違いから来るものかも知れないが、本作などは、花「輪」輪がまるで別人格を持つ女人のごとく描かれている。それを、「画家自身の青春への羨望表現」と見ると叱られるかもしれない。



⑩《桜島》1975(昭和50)年 38.0×45.6cm (8号F)

関西美術院で黒田重太郎門下の先輩だった伊谷賢蔵が好んで描いた桜島の絵は、揺れ動く大気の鳴動を描いて有名で人気がある。一方、わが福井勇の桜島は、静かな風景の中でゆったりと構えながらも、柿色の赤を駆使して、うちに秘めるエネルギーのようなものを上手く表現しているようで、伊谷とは違う魅力がある。



⑪《栗》1968(昭和43)年 27.4×45.5cm (8号M)



⑫《花(虞美人草)》1971(昭和46)年 41.0×32.0cm (6号F)

星野画廊

<http://hoshinogallery.com/>

京都市東山区神宮道三条上ル
〒605-0033 夷町152

電話 (075) 771-3670

FAX (075) 771-7667

e-mail: hoshinok@poppy.ocn.ne.jp



②《高山寺の秋》1962(昭和37)年 61.0×73.0cm (20F)



②《柿・栗》1970(昭和45)年頃 24.3×33.3cm (4号F)



⑬《柿》1979(昭和54)年 32.0×41.0cm (6号F)



⑩《虞美人草》1970(昭和45)年頃 24.4×33.3cm (4号F)



⑫《壺と柿》制作年不詳 24.3×33.4cm (4号F)



⑩《秋果図》制作年不詳 24.3×33.5cm (4号F)



⑩《柿の図》1966(昭和41)年 32.0×41.1cm (6号F)

赤、そして、ともし火
菅原芳光(京都精華大学長)
この十数年、おりふしに見てきた数々の絵と、いまおもいかえずと、
残像しているのは、やはり柿や栗や梅干の赤である。
赤色といつても赤、赭、茜、朱、紅などと微妙に異なるけれど、そ
れらは画面全体の昏く、深く、暖かい色調の中で、あたかも、この画
家の存在の微のようにかがやいている。

『福井勇画集』(1984年)より抜粋

福井 勇 略歴

- 1908年 京都府(現)綾都市に生まれる。
- 1928年 京都府師範学校(現京都教育大学)卒業。
- 1930年 関西美術院で都島英喜、黒田重太郎に師事。
- 1933年 第20回二科展に初入選する。
- 1938年 関西美術院の二科系若手の「白亜会」に参加。
- 1938年 京都市展で京都市長賞を受賞する。
- 1940年 京都市展で京都市長賞を受賞する。
- 1941年 京都市展で京都市長賞を受賞する。
- 1943年 第30回二科展で二科会友となる。
- 1946年 第一回行動展(出品)行動美術協会会員となる。
- 1968年 京都精華短期大学(現大学)教授となる。
- 1981年 京都精華学園理事長となる。
- 1983年 関西美術院理事長となる。
- 1983年 京都市文化賞功労賞を受賞する。
- 1988年 没。享年80。



④《冬日静物》1972(昭和47)年 45.6×53.4cm (10号F)



⑩《虞美人草》1971(昭和46)年頃 27.6×22.0cm (3号F)



⑩《虞美人草》1971(昭和46)年 53.3×45.5cm (10号F)



⑩《柿》1970(昭和45)年 45.8×53.3cm (10号F)

※出品作品は全てキャンバスに油彩・額装です。



⑩《柿の図》1951(昭和26)年頃 32.8×53.0cm (10号M)



⑩《柿の図》1951(昭和26)年 24.0×33.0cm (4号F)



⑦《柿・栗》1970(昭和45)年 15.8×22.6cm (SM)



⑦《柿・栗》1970(昭和45)年頃 24.5×33.3cm(4号F)



⑩《虞美人草》1967(昭和42)年 27.4×22.2cm (3号F)



⑩《虞美人草》1967(昭和42)年 27.4×22.2cm (3号F)



⑩《柿七つ》1971(昭和46)年 32.0×41.0cm (6号F)



⑧《桐花風景》1972(昭和47)年 31.6×40.7cm(6号F)



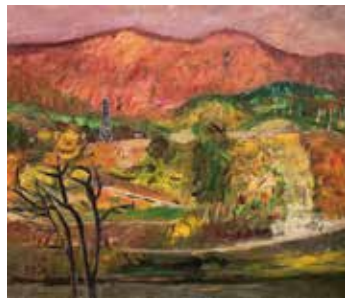
⑩《静物》制作年不詳 37.9×45.5cm (8号F)



⑨《丹波風景》制作年不詳 37.7×45.3cm (8号F)



⑥《霧の村》1972(昭和47)年 38.0×45.5cm (8号F)



⑦《丹波の秋山》1980(昭和55)年 45.7×53.0cm (10号F)

霧深い盆地ならではの風景、風物、柿、栗、瓦など、詩情豊かな絵画世界は、生涯寡黙で気取らない画家の性格ゆえに生み出された心の風景。二紀会展や京展の出品作は、いずれも力のこもった力作ぞろいだが、力みの少ない小品にこそ画家の普段の思っかが窺える愛すべき佳作が多い。長年人知れず集めてきた小品名作の数々が星野画廊に並び、

星野画廊

http://hoshinogallery.com/
京都市東山区神宮道三条上ル
〒605-0033 夷町152
電話 (075) 771-3670
FAX (075) 771-7667
e-mail: hoshinok@poppy.ocn.ne.jp

『星野画廊50年史』好評発売中!
特B5判 全248頁 頒価: 3,960円
—青幻舎刊—